

重要な注意事項

- ・ 本レポートは、投資の参考となる情報の提供を目的とし、証券の売買勧誘を目的としたものではありません。業績等は今後急激に変化する場合がございます。投資判断はお客様ご自身でお願いいたします。
- ・ 本レポートは信頼できると思われる資料を元に作成したのですが、その正確性、完全性を保証したものではありません。本レポートに記載された意見や予測は作成時での当社の見通しであり、今後予告なしに変更される場合があります。
- ・ 株式には株価の下落や発行者の信用状況の悪化などから、投資元本を割り込むことがあります。外国株式は為替の変動により損失が生じるおそれがあります。
- ・ 国内株式の売買取引には、最大手数料は5000万円超の約定代金に対して一律229,005円（税込み）が必要となります。（ただし約定代金に応じ手数料は変わります。手数料金額が2,500円に満たない場合は最小手数料として2,625円（税込み）となります。）保護預り口座管理料は0円です。
- ・ 本レポートは当社に著作権があり、事前の承諾なしに、本レポートの全部または一部を引用または複写、転送することを禁じます

当社の概要

商号等	三木証券株式会社
登録番号	金融商品取引業者 関東財務局長（金商） 第172号
加入協会	日本証券業協会
指定紛争解決機関	特定非営利活動法人 証券・金融商品あっせん相談センター
本店所在地	〒103-0027 東京都中央区日本橋1-20-9
資本金	5億円
主な事業	金融商品取引業
設立年月	昭和17年12月

1月の投資環境

今月の投資視点

皆様、新年おめでとうございます。「ユーロ危機」「財政の崖」「衆議院選挙」など、何かと騒がしかった2012年が終わり、2013年の良き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。三木証券の定期刊行物である「投資環境」「三木レポート」が皆様の投資の一助となりますよう、さらに内容を充実させてまいります。本年もご愛読のほどよろしくお願い致します。（投資情報部 部長 高橋春樹）

【本来の干支の意味で見る 2013年相場】

◆「辰巳（たつみ）天井、午（うま）しり下がり、未（ひつじ）辛抱、申酉（さるとり）騒ぐ。戌（いぬ）は笑い、亥（い）固まる、子（ね）は繁栄、丑（うし）はつまずき、寅（とら）千里を走り、卯（うさぎ）は跳ねる」。これは干支で株式相場を占う有名な格言であるが、本気で信用する人はいるまい。本来、干支は暦の学問。干支は「十干（じっかん）」と「十二支（じゅうにし）」を組み合わせた60通りの組み合わせ「六十干支（ろくじっかんし）」で、年月を示すのに使われていた。また、干支は生命の発生から終末・含蓄に至るまでの「生命の消長」を表しているという説もある（六十干支が一巡して60年目に甦ることから60歳は「還暦」と言われる）。しかし、干支を利用した占いが普及したことで「干支＝占いの道具」というイメージや、民衆に分かりやすい十二支が普及したことで「干支＝十二支」という誤認が広がってしまい、本来の意味は次第に忘れられていった。そこで本来の「干支」の意味に立ち返って相場を占ってみたい。

【癸巳（みずのとみ）の意味】

◆今年「六十干支」の30番目の「癸巳（みずのとみ／きし）」にあたる。戦後の政財界に多大な影響を与えた思想家の安岡正篤（1898～1983年）の著書「干支の活学」によると、「癸」という文字はぐるぐる回して使用した道具の象形文字であるという。この道具はコンパスのように回転させて使うことから「はかる」という意味が生じ、人間が手を加えて原理・原則に基づいて企画を立てるという意味を持つ「揆（はか）る」が生まれたそうだ。こうしたことから「揆」は百事をとりはからう大臣・宰相を指すようになり、「揆職」は総理大臣を意味することになった。蛇足であるが、中国の儒学者・孟子の言葉に「先聖後聖その“揆一”なり（いつの時代も天下を治める“道は1つ”）」がある。また、歴史の教科書で

1月の投資環境

目にする「一揆」は、政治が道筋を失い自然に起こる騒動という意味である。なお、十干の順番では「癸」は最後の10番目で季節は冬。そのため「癸」は、冬が訪れて草が枯れて見えてきた四方の水路の様子を象った文字という説もある。

◆一方、「巳」は蛇の象形文字。春になって陽気を迎えると、地中に冬眠していた動物が地表に這い出す。今まで潜伏していたものが頭をもたげて、外に出て活動を始める。地中に潜伏している様々な動物の中で一番民衆に分かりやすいのは蛇だから「巳」を蛇というようになったという。本来の意味は蛇に限らない。巳は従来の因習生活に終わりを告げることを示し、巳（やむ）と同じ意味である。

【相場の格言に反して2013年の市場を強気に見たい】

◆こうした本来の干支の意味から推測すると、「癸巳」の2013年は「見通しが効いて筋道の立てられる気概と勇気を持った政治家が出て、国民生活に大切な政策を計画し、山積みの問題を解決しなければならない年」と言えよう。もちろん新興政党や国民も「揆を一」にして協力しなければなるまい。そうすれば、2013年は長引くデフレも巳（や）み、見えなかった日本の進路がはっきり見える年になるかもしれない。だが、政治が誤れば、次第に「揆」の「はかる」という意味が失われ、市場の混乱と言う「一揆」に見舞われる危険性もはらんでいる。

◆現実にも目を向けると、我が国の問題は山積みだ。高齢化が進む社会において現行の社会保障制度はいずれ行き詰まるし、原発事故を踏まえた将来のエネルギー政策は道筋さえ見えない。円高とデフレの中で企業の体力は落ち、デジタル家電の一部では韓国メーカーなどとの競争に完全に負けている。また、デフレは国民の資産も蝕み、不動産バブル崩壊後の20年間に資産（土地・株）は約1500兆円も失われしまった。暦学からすると、このような問題を安倍政権は解決しなければならない使命を背負っていることになる。幸い副総理兼財務・金融相に就任した麻生元首相は、かねてから企業レバレッジ削減の背景にあるのは資産デフレと指摘しており、思い切った政策が望めそうだ。デフレ脱却策への信頼感が強まれば、衆院解散後の日本株の上昇をリードした海外投資家の買いは一段と長期的かつ大規模になる可能性がある。世界の主要市場が軒並みリーマン・ショック前の水準を回復している中、日本市場の出遅れ感は際立っている（リーマン前日の08年9月12日の日経平均終値は12214円）。冒頭の格言によると「巳年」の2013年は「天井」だが、本来の干支の意味を信じ、外国人好みの大型株を中核に据え、強気の投資スタンスを取りたい。

2013年1月4日（高橋春樹）
